

# 「気になる木」



山本千明

(ECC英会話講師)

ある日突然に、「それ」は視界に入ってきた。庭の隅に突き刺さった一本の割りばし。「何だ?」と近付くと、地面に刺されたものではなく、地中から顔を出した木の芽だと判明した。玄関前にはフェンスに囲まれた10mプール程の、やや広めの庭があるが、花など何も植えてない土だけのスペース。その端の方に多少植物が育っても「緑ができてよかったね」くらいの感覚でそのまましておいた。「えっ、ちょっと待って。お前、何者!?!」と思い始めるのに一年とかからなかった。成長のスピードが異様に速い。一夜にして、とは言えないまでも、「豆の木」に驚く「ジャツ

ク」の気持ちに分かるほどだ。

女性の人差し指ほどのスラリとした葉をつけて傘状に広がりながら幹はひたすら天を目差してスルスルと伸びていく。風にサワサワと揺れる様は涼やかで「いやし系」だが、何という名の木か不明のままである。人間と同様に、見た目だけでは判断できない。何度か植物図鑑を開きながら見比べてみたが、葉の形状だけでは素人には区別がつかず、三年以上、正体不明の怪しい木のままだった。

触ってかぶれないか?変な虫がつかないか?毒はないか?と疑心暗鬼の毎日である。頭の中では常に、「この木、

何の木、気になる木」と、かの有名なCMソングが流れていた。たしか、あの歌の続きは、「見たこともない木ですから〜見たこともない花〜花〜が咲くでしょう〜」だったなあ。などと思っ  
ているうちに五年ほどが経ち、本当に「見たこともない花」が咲いた。一センチ足らずの薄紫色の可憐な花だ。手の平を縮めて五本の指をスツと伸ばしたような花弁が次々と開いていく。群れて咲く様は藤の花にも似て気品が漂っていた。少し離れて木の全体を見ると、新緑の葉の間に薄紫色の霞がかかったような趣もあった。花で調べれば分かるかも。と改めて図鑑を引っぱり出すと、あった!目の前の花と全く同じ花の写真だ。そしてその上には「センダーン」と書かれている。聞き覚えのある名前だ。毒があるどころか「実」は生薬になるらしい。よかった。見た目通りのいいやつだった。ホッと胸をなでおろしたものの次の行の説明に目が点になってしまった。「街路樹、七〜八m」「ええー?!そんなに大きくなるの!?!」

確かに五年ほどで二階のベランダに届く勢いではあるが、ここは「街路」ではない。一般家屋の庭の中だぞ。大きくなるにも限度があることを知ってほしい。だが、さすが植物図鑑。嘘は言わない。花が咲いてさらに三年。二階のベランダはふっさりと葉をつけた枝々に覆われて、幹の先端は既に六mは余裕で超えている。

すぐ隣はよそ様の田畑である。陰になるような大きな木は植えてはならない、というのが田舎の常識。植えたのではなく、勝手に生えたのですと言い訳しても、ご迷惑をかけていることに変わりはない。ただ、困った事にいつしかこの木は我が家の風景の一部となっていた。猛暑の中でも緑を通る風は涼しく、木陰に入るだけで、「森気分」を味わえた。滝のような蝉時雨も力強い生命力を届けてくれる。モザイク模様の丸いテーブルとアイアンの椅子を二脚、木陰に置いてみると立派な「カフェ」になった。秋になるとそこに座って、お月見をする。緑の枝々の隙間から見

える凜とした中秋の名月は格別で風流だ。冬が近付くとハラハラと散ってスラリとした枝だけになるが、春となれば息を吹き返したように薄緑色の葉をまとう。やがて煙のような薄紫の花を付けて葉は濃い緑となり、夏の終わりに黄色く丸い実が落ちて来る。一年を通して褐色の庭に「風情」を加筆してくれるのだ。

近所迷惑と知りつつも切り倒すのは忍びなく、とりあえずブロック壁を越えた枝だけでも切るようになった。町内の造園業社から三人職人さんが来てくれた。一人、白髪の男性が木を見上げ、「ほお。立派な木やなあ」と声をもらした。手際良く次々に枝を落として約二時間後にはスッキリとした姿に仕上がった。うっそうとした枝々が軽やかに風通し良くなっている。ただ一度カットされた木は逆に頑張ると今まで以上に根も葉も伸ばし始めると言われた。最終的にはやはり根元から切るしかないのか、と複雑な心境で黙って見上げることにできない。その時、

白髪の職人さんがセンダンを見上げながらひと言呟いた。「この木は幸せを運んでますよ」

今だに何故あんな事を言われたのか不明である。「割りばし」から、大人が抱えて余る幹に成長した木を切り揃えながら何か感じるものがあつたのだろうか。その後、センダンに関する記事をいくつか見つけた。「センダン」の古名は「あふち」「会う」に掛けて「愛する人に会う木」と親しまれている。「紫色に淡く煙る（花の）様子を清少納言は『いとをかし』と書いている」等々。あの職人さんの言葉が改めて胸に染みてきた。

寒風の中、潔く葉を落とした「彼はしなやかに肢体を伸ばし、ポーズを決めたバレリーナのように静止している。次なる跳躍の為のエネルギーを蓄えているのだろう。縁あってここに来てくれたこの木とこれからも共存できるだろうか。いつまで経っても「気になる木」のままだ。

# 稲を育て、思う



## 宮本富夫

(高松大学 教授)

本業のかたわら稲を育てるようになって何年になるだろう。「先祖伝来の水田を水田として維持するように」との父母の願いに応えたいが、始まりであった。うまい米を食べたい、安全な米を食べたい、そして食べてもらいたいという願いもあった。

稲を育て、いくつか学んだ。その一つは、好きな花を育てると同じく、楽しみ、喜びがあること。水に浸され白い根をのぞかせるモミ、苗床ですつと伸びるうす緑色の子葉、水田に移植され勢いよく伸び始めた若苗、分けつがすすみ、たくましくなった株、茎の上部が膨らみ始めるはじめた穂の先端部、先端から順序良く花をつける穂、受精を経てふっくらと膨らむ穂、先端部がたれ始めた穂、そして風に揺れる黄金色の穂等々。日々刻々と変化し、成長するさまは心に響く。その一方で、水は足りているか、光は十分か、気温

は適切か、病気はきていないか、虫に食われていないか、もの言わぬ稲と対話する日々。少しでも生長が遅れるようだと、大丈夫かなと気を揉む。風が強く吹くと、葉が痛み、茎が痛み、倒れるのではないか。雨が降り続くと根が痛むのではないか、日照不足になるのではと。逆に日照りが続くと、水不足になるのではないかと心配る。稲と対話し、こちらが少しこたえられるのは、水と肥料ぐらい。気を揉みつつ、見守るしかない。順調に生育し、収穫を迎えたとき、「ようがんばったね」と呼びかけ、感謝し、喜びに。

二つめに、稲は主食を供給する作物として申し分ないこと。ごく普通に、毎年同じ田に同じように育て、四〜五ヶ月後にはそれなりの収量を期待できる。一年を超えての保存がきく。連作ができ、連作を可能にするシステムがほぼ完成されている。野菜だとうはいか

ない。多くの場合、違った土壌で育てないと、期待する品質と収量を確保することはむずかしい。

稲の連作を可能にしているのは、栽培に大量の水を使用することにあるかもしれない。栽培には、普通、池や川の水が使われる。池や川の背景には多くの場合、里山が控える。里山には木が育つ。雨が降ると、木の落葉、落枝、枯れた幹に含まれる成分は徐々に分解され、雨水に溶け、池や川に運ばれる。稲の成育に必要とされる微量成分を含む水が適宜水田に供給され、稲の生育をささえることになる。一方で、田に

張られた水は地下へ浸透していくので、生育に都合の悪い成分は、水田の土壌から洗い流されていくのではなからうか。必要な成分が水に運ばれ、具合の悪い成分は、水によって地下へ流されるところというシステムがはたらく。それが連作を可能にしているのではと考えてみたが、本当のところはよくわからない。

このシステムの機能を支える仕組みが水田の構造にあるように思う。水田は水平に保たれ、周囲に畦をめぐらせる。このことによって水口から入った

水が田全体に広がり、地下へ浸透することになる。余分な水は水戸より流されるが、水田そのものが水平であるため、水田の土壌を流すことにはつながらにくい。大切な土壌を失わずに、水を地下へ浸透させるシステムといえようか。カナダやドイツで見た農場は日本の水田のように水平ではなく、畦に相当するものもなかった。植物が生育していないときに大雨が降ると、植物の根によるささえを持たないので、土壌そのものが雨水によって低い方へ流される。ひどい場合には、土壌の流失につながるかもしれない。このように考えると、日本の水田の構造は実にうまくできている。このような工夫を見出した先人の知恵に頭が下がる。

地下へ浸透した水は地下水となる。地下水はくみ上げられ、あらためて利用されるかもしれない。稲作では大量の水を利用するが、ほっておくと海へ運ばれる雨水を利用し、捨てるのではなく、大地へ留める。水田が緑のダムといわれる所以だろう。このような水とのつきあい方は、はるか弥生時代まで遡るといわれる。都市に生活するわれわれの水とのつきあい方とは大きく

異なる。洗面、水洗トイレ、洗濯、台所での洗い物、風呂など、すべて汚すのみ、消費するのみである。

三つめに、稲作を営業ベースにのせることは難しい。収穫した玄米を出荷すると等級が決められ、暫定価格が決まる。検査官が袋あたり二ヶ所から米を抜き取り、目視で判定する。米粒の見た目の状態と夾雑物の種類と量が決め手になるらしい。同時に栽培履歴を提出するが、どの程度活用されているかはわからない。検査に立ち会い告げられることは、米粒のほりがいいとかよくないとか、きれいな米であるとか、そうでないとか、カメムシやウンカに食われた米が混入しているとか、である。EMの堆肥を使っているとか、レングを育てた水田で栽培したとか、化学肥料の使用を抑えているとか、稲にストレスを与え、使用時期を間違えるとか、米に残留するかもしれないということ、で、農薬の類を使用していないといったことは考慮されない。食味乾燥という普通の乾燥より低い温度で時間をかけ、胚乳の成分と胚の部分を傷つけないようにした努力も考慮されない。見た目の判断に基づいているようである。

ここには、「より安全な」とか。「うまい」といった評価は入ってこないらしい。配布される栽培のしおりに従って農薬を上手に使うと、虫に食われた米が少なくなるので等級は上がる。しかし、精米され消費者にわたる米には品種と産地の表示はあるが、等級の表示はない。特別な販売ルートを開拓しないと、栽培努力に見合う価格を期待することは難しい。

副業的に稲作に取り組むとコストがかかる。時間と手間を機械に置き換えることになるから。トラクター、田植え機、コンバイン、乾燥機、粃摺り機、選別機等が代表的な機械である。作業日が重なり、近くの農業者と共同購入し、共同利用するというかたちがとりにくい。「安全な」という視点を入れると、機械そのものへの農薬による汚染を避けなければならぬ。農薬を使う農業者と機械を共有するわけにはいかない。米の売り上げから、機械の購入・維持費を個人でまかなうことは、とやがてできない。父母の願いをかなえることも、安全なうまい米を生産することも、容易いことではない。

# 清姫の幽霊

とある会社のミステリーツアーに家内と参加した。

「とある伝説の寺を拝観し、とある島の温泉ホテルに宿泊」とある。

「とある寺」とは和歌山県の道成寺であり、「とあるホテル」は那智勝浦沖の中之島のホテルであった。

温泉に浸かり酒も十分に飲んで寝た私は、夜中の二時頃に尿意と喉の渇きで目が覚めた。用を足した後、少し酔いを抜きたいと思い、その旨を家内に告げて温泉に向かった。



夜中のことであり、浴場には洗いの電灯が点いているだけで薄暗かった。

一人で湯に入っていると、やがて水面が落ち着き、洗い場の丸い電灯が私の足先に白く光っている。その顔のような光が、道成寺で見た清姫の絵を思い出させた。

道成寺では、住職が伝来の巻物を示して、「安珍と清姫」の物語を講釈師のように語っていたが、私は、講堂の壁面に飾られている二人の物語が描かれた数枚の絵に見とれていた。その中で

も等身大の清姫が、肌が透けて見える薄絹を纏って立っている絵は、美しくても寺には不似合いな色気があった。

その清姫の清楚な顔を思い浮かべ意識を集中して、目、口、鼻と足元の丸い光の中に描いていった。集中力が弱まると忽ち消えてしまうので、目を半眼にして頭の芯が痛いほどに念じると、顔がだんだんと明瞭になってきた。思念を更に強くして、絵で見た清姫の全身を思い浮かべると、顔がゆっくりと

山西靖彦

(香川県酒造組合専務理事)

足元から起き上がり、首、胸、腹、大  
腿と立ち上がってきた。少し驚いたが、  
これらが私の頭の中で思念した幻覚に  
すぎないということも、冷静に判断し  
ていた。その幻覚の清姫は、薄絹を透  
して乳首や秘部の陰りも仄かに見えて、  
清楚でかつ扇情的であった。

幻覚を十分に楽しんだので思念を停  
止した。

ところが幻覚は消えない。思念を切  
り替え、消えるように念じてても、消え  
ない。「きえろ。きえろ。きえろ」と必  
死に念じてても消えない。逆に、霞のよ  
うに頼りなかった幻影が少しずつ明確  
になってきた。ふと私の思念が清姫の  
幽霊を呼び出してしまったのではない  
かと思った。しかし、そんな筈はない。  
これは私の頭の中に生じた幻影だ。私  
の頭の中にある好色な深層心理が見さ  
せているのだ。冷静になれば消えるも  
のだ。

心を落ち着けると、なぜか、この浴  
場の入口に「殿方」と書かれた暖簾が  
掛かっているのを確認してから入った

ことを思い出した。そうだ、ここは殿  
方用だ。女性用でも混浴でもない。私  
は、清姫の目をしっかりと見て、威厳  
を込めて言った。「ここは、殿方用で  
よ。」と。

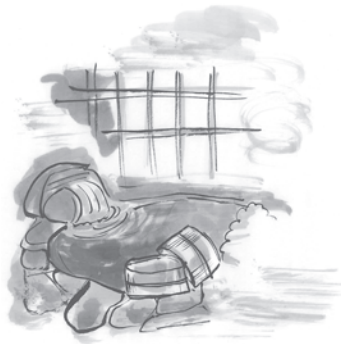
清姫の目が少し笑った。そして「こ  
こは」と左手を秘所の陰りの方へ移し  
ながら「殿方用ですよ。」と言った。

その言葉の意味、「清姫の秘所が私用  
ということ」を理解するのに五秒程を  
要した。即座に理解できなかったこと  
が、この清姫が私の頭の中の幻覚では  
なく本物の幽霊であると確信させた。

清姫は、私のこの確信を認めるよう  
に微笑み、そしてゆっくりと私に向かっ  
て来た。

その時突然、浴室がパツと明るくな  
り、「あら、お父さん」と家内の驚いた  
声が出て、「ここは、女性用ですよ。」  
と、言った。清姫の幽霊が消えた。

ホテルの従業員が、私が入浴してい  
ることに気付かずに、男女の暖簾を差  
し替えていたのであった。



## 小説・江戸神仏歳時記 (22)

## 根津神社



## 郡 順 史

根津神社に関して、二つ三つの強烈な思い出がある。

まずその一は、江戸三大祭り。

先輩のK氏が、文京区根津で産れたせいとか、「江戸三大祭いわゆる天下祭りは、山王神社と神田神社、それに根津権現神社を加えて称するのが本場で、他の神社が、根津権現をのぞいてウチがと言っているのは、みんな自稱だ。第一に、山王、神田、根津と他は、神社としての格式が違う」と、さかんに主張していた。

小生にはよく判らない話なので、尊敬する先輩が断乎として言うので、そうか、と思っていた。ところが今回あらためて根津神社を訪れて、由緒書きを頂戴し、それにあっさり、同じ格式による山王祭り、神田祭りとおわせて当社と江戸三大祭りと言われている」と書かれている。つまり先輩の主張は正しかったわけである。

次のこだわりは神社名。

我々一般人は、神社名をおよびする時、「根津権現」とおよびし、「根津神社」とはおよびしなかった。それが現在はずべて「根津神社」に統一されている。なぜか、とおたずねすると、「明治維新の際、天皇陛下から勅使をいただいたゆえ。また昭和六年國宝（現重文）に指定された故、あらためて」との事でした。

さり乍らこの神社をこの地にお移し、現格式によつて再建、再奉されたのは、徳川五代将軍綱吉公だから、社殿を日光東照宮になぞらえて権現造りにしたのだ。おそらく家康公も御祭神に加えられていであらう、という思い込みで、家康公の別稱「権現」を神社名にして呼びならわすようになったのではないか、との推理である。それはさておき、では先は、御祭神を知らねばならぬ。話にもならぬ。

この神社の御祭神はたくさんいらつしやる。須佐之男命、大山咋命、誉田別命、大國主命、菅原道真公の方々である。これで見ると、道真公をのぞいて皆さん記紀に登場なさる神話の中の神様であるが、その中になぜ道真公という歴史人物が加わっているのであらうか。多分学問の神様としてであらう。

例祭は九月二十一日。この例祭に関して面白い行事、話がたくさん有るゆえ、後述するとして。

まずは当神社の御由緒書によると、創祀したのは、千九百年の昔、日本武尊が千駄木の地に創祀し、ついで六百年ほどたった文明年間（応仁の乱直後）大田道灌が社殿を奉建し、更に徳川時代になつて五代将軍綱吉公が、跡継ぎが決定した喜びに千駄木の旧社地より移して、当地に建てた。

その時、隨身門にかかげた額は、「根津大権現」と書かれてあり、筆者は大明院宮公弁法親王で見事な筆勢であつたという。この額の文字からも、

根津権現と社名が一般によびならわされた。

それと同時に、この地は六代将軍家宣公の住居だつたゆえ、むろん立派な建築の屋敷であつたが、それ以上に庭園が豪華と言うより美麗であつたという。

殊につつじが庭一面に整然と植えられており、他の花々と同時に、季に至ると天外の相をみせたという。ゆえに江戸中の武家町民が拝覧を希望して、見物に押し寄せたと伝えられる。この事から徳川時代を通して「江戸の花」と言われ、今日でも季に至ると神社の参拝人が増えるという。

ざれ語に、「日光（にっこう）見ずに結構（けっこう）と言ふな」と言うのがあるが、この庭園も、「根津の権現さんのつつじ見ずにつつじと言ふな」と言う言葉があつたというが、余りすつきりした警句（？）ではないし、はやつたように思えぬが、当社の花々が感嘆するほどに美しかった様子は伝えられる。

花といえは酒。普通は花すなはち櫻であるが、此処ではつつじ。

むろん当社でも花を見るのは許可しても、社内では酒食を禁止している。だが酒に酔つて社内を歩くのまでは取締れない。

それゆえ他で飲んで神社内に入ってくる者がいる。どこで酒を飲むのか。

商売人はその点にぬかりはない。周囲に酒の飲み所を作り、それだけで足りず、女も置く。いわ



ゆる岡場所という酒も女も売る店の林立である。そうした店が、あまり名譽な話ではないが、根津の岡場所は、いつか江戸一番と言われるようになったという。

飲んで酔えば、氣の荒くなる者が続出し、境内で喧嘩口論をはじめ。神社では仕方なく取締りの係の者をおき、つまみ出すが、厄介として、酒を飲んでゐる者は入れない事にし、反抗する者は役人（寺社奉行の）に引渡すことにしているという。

## 二

さてではお参りし、両掌合わせてお願いすると、いかなる御利益をいただけるのであろうか。

この事は、どこの神社でも余り強調も吹聴もなさらぬ。「神社は、御利益をお願いするより、ご自分を清浄にするために参拝するところでございます」との返事が返るのが普通で、これまで三十社近い神社仏閣をめぐり、同じご返事を何度拝聴した事か、

だが我等一般庶民はご利益が一番の狙いで、これまでご利益がさかんに下さるとの評判が有るうちは参詣人が大勢おしよせるが一端く下さらないとなると、びったりと足が止ってしまふ。

この神社も、「家内安全、健康、除盜難災厄、学業進歩」をいただけるとなっていて、金儲けと

かバクチ事に勝つとかは御利益の項目に入っていない。当然であろう。

だが、この神社は、須佐之男命、日本武尊が主神で、従って武神であるゆえその面でのご利益があるとと思うのが普通であろう。

殊に須佐之男命は、ご存知の如く有り余る勇氣と勇猛さをお持ちの神様で、それゆえに高天原を追われ、出雲の國に降り立ち、八頭の太蛇を退治し、庶民の尊敬をうけ、國主になった、と言われているお方ゆえ、殺傷の難を除いて下さるものと思ふ。

しかし乍ら神社側としては、ほとんど絶対といってよいくらい、神々のご利益を教えても下さらないし、吹聴もなさらぬ。

従ってこれまたこれまでと同様、ご近所に住む氏子さんに訊き尋ねるのが一番である。だがもつとも噂の原泉となる岡場所、つまりあれほどあつた呑み屋さんがいまは一軒もないので、探して聴くのも大変であつた。

しかし花屋のおばさんが、七十六歳という物識りの氏子さんを紹介してくれたのでお尋ねする事が出来た。

まず、「この神社さんのご利益は、どんな特色がございますでしょうか」と、あけすけにズバリと訊いた。

すると達男という名のその氏子さんは、「江戸時代は、大名や旗本、御家人のお屋敷や住宅が多くて、その人たち、つまり二本差しの氏子

がほとんどで参拝人も同様、あまり神社さんのご利益を耳にしないな。それよりもこの辺は風光明媚な土地柄で、住んでいるだけで極楽だったようですよ」

「でもこの神社はつつじを始めとして花々が美しく、遠く江戸市中から二本差し以外の、いわゆる町人さん達も大勢押し寄せた、と聞きます。その人たちの中には、ご利益を求めて参拝に来た人もいるんじゃないでしょうか」

それはいるかもしれないが、そういう連中は、さつさとお参りをすませ、その辺で一杯やるのが目的じゃなかったかな。呑み屋には何人の女もいて、いくらでも遊べるようになっていたからね」

「おじさんも遊びましたか」

「そんな事は知らないよ」

と一たんトボケてから、

「だが、男というのは酒が入ると気が荒くなつてか、すぐ喧嘩をはじめてね。権現さんも困つたようだよ。もつともそれも神社さんの繁昌のもとになっているところもあつてね。そうそう、咲き乱れたつつじが、泥棒を捕まえた、という話をきいた事があるよ」

「ほう、つつじが泥棒を。面白そうですね。どうやって捕まえたのでしょうか」

「なあに、泥棒が、ご神前の小さな何かを盗んだ所を見つかつて、あわてて逃げだして、つつじの根方で転がって、逃げられなくなって捕つたと言

う話なのさ」

「なるほど。面白い話ですね」

たいして面白くもない話だが、折角だから世辞半分は笑って感心してみせると、先程から少し離れて我々の話を聞いていた老婆がつかつかと近寄ってくる、

「あんた、さ、ここのお祭りのお神輿（みこし）やお山車（だし）が立派できれいで勇ましいのを知っていないさるかね」と訊いてきた。

「申しわけないけど縁がなくて見ていませんが、江戸時代には山王さん神田明神さんと並んで江戸三大祭りとの評判がありますから、立派で勇ましかったのでしょうかね」

「そうなんだよ。お神輿やお山車さんも威勢がよくてね。でも、誰がかついでいたか、知つなさるかね」

老婆も老人も、そして小生も知らない江戸時代の話だから、当然老婆だとして見たこともないし、話に聞いただけのものだろうが、しかし面白そうなので、

「あの喫茶店でお茶を飲みながら聞かせてくれませんか」

と、少し離れた所にモダンな造りのコーヒー店があったので老人ともども誘ってみた。

## 三

「お神輿やお山車をついで引っぱり引つぱりしたのは、ほとんど二本差しのお侍さんなんだよ。もつとも刃を差したり袴をはいて、かついで引つぱりしたわけじゃないがね」

イスに座ると同時に老婆は喋りだした。元氣をもてあましているような喋り方であった。

「へーえ。では威勢がいい筈ですね。でも、幕府でよく許しましたね。この辺には江戸時代若い男の氏子はいなかったんですかね」

「いたよ。いたけど、数が少なくてね。で、お武家さんがかついだのさ。お上の方には内緒で。お上の方も徳川さんがお造りになった神社さんだから横を向いてくれたんだろね。だから、権現さんは出来て新しいわりに、江戸三大祭りに入れて貰えたんだそうだよ」

「なるほど。お婆さんはいまの話、どうして知ったのですか」

「子供の頃から祭りになると、お爺さんや父親から聞いたのさ。何しろうちは、九代も続く大工職の家だからね」

「先祖代々、というわけですね」

「それよりお兄さん。この根津の地は、権現さんも有名だけど、もともとは風流の里として有名なんだよ。日暮里の夕陽とか、特別の声で鳴く鶯谷の鶯とか、太田道灌さんの道灌山が有ったりとか

で、昔の文化人のあこがれの里だったんだよ」  
「そうですね。貴重なお話を、有難うございました」

もつとお爺さんやお婆さんの話を聞いてもよかったのだが、お婆さんの話の中に太田道灌の名が出たので、道灌山は遠くて（？）行けぬが、神社をあらためて見たくなつたので、話を切つたのだ。そして神社でいただきたいきれいな冊子を手に、あらためて鳥居をくぐり御社殿などを拝見する。

立派というよりも美しい。権現造りの本殿、幣殿、拜殿、唐門など、造りは日光のそれよりも小ぶりではあるが、小生にはどうしても日光東照宮を連想させ、権現の名が付いた神社名がふさわしいと思ってしまう。

それとは別に、一つの発見（？）があった。同じ境内の北東に、「乙女稲荷神社」のお社があったのだ。何とやさしくてロマンチックなお稲荷さんなんだらう、と思う。なぜこのような美しくも優雅な名がついたのだらうと、しばし自分だけのロマンを描いてご社殿の前に立つて動かなかった。

社務所へ訊きにゆけば、由緒なども教えてくれるであらうが、それをしたくなかつたのだ。自分だけのロマンを胸にだいて去りたかつたのである。こんな事、神さま、乙女稲荷さんに悪いかな、と思いつつ、つつじヶ岡に向つた。

有つた。つつじの山盛りである。

しかし今はつつじの咲く季ではないゆえ、薄青

く盛り上がったのだが、盛りの時は、一種類だけでなく何種類のものが一齐に咲き、盛り上がるのだから、美しさもさりながら豪華絢爛さを実感させてくれるだろうな、と思った。そして、その季に、またまたお詣りし、じつくりと拝見したい、ともあわせ思った。

神社の外へ出た。すると、

「どう、お詣りしてよかっただろう」

と声をかけられた。さっきの元氣お婆さんであった。手に袋を下っている所をみると、あれからスパーにでも寄った帰りでもあろうか。

「つつじの咲く頃、またお詣りさせていたどころかと思っています。でもたった一つ、判らない事が残ってしまいました」

と答えると、「何が心残りなの」とすぐに乗ってきてくれた。

「ご利益です。この神社さんは、家内安全健康とか、交通事故のがれとか、どこの神社さんにもあるご利益と同じではなくて、この神社さん特有のご利益はなんだろう、て」

「それなら簡単だよ。神社さんからお札をいただいで、それを玄関でもどこでも、家の出入り口に貼っておくと、泥棒や空き巣狙いが絶対に入らないよ。江戸時代の昔、変なはやり病もそれでのがれた、という言い伝えもあったよ。だからウチでも貼ってあるよ」

「ああそうなんだ。いい事を聞いた。さっそく

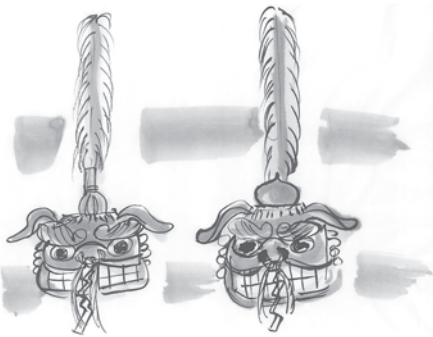
やってみます。どうも有難う」

神社の外はビルが林立している。その間をぬってバス停に行き帰路についた。

東京の中心からは少しはずれだが、こんな立派な神社が有るのだと、取材ノートを小脇にかかえ、何やらすがすがしい氣持であった。面白いお婆さんに逢えたからかな、とも思った。

根津神社のご住所は、一一三〇〇三一、東京都文京区根津一一二八一九、である。

ーおわりー



## (表紙説明)

## ■ 讃岐かがり手まり

戦後三十余年の時をかけて、失われかけた讃岐に伝わる毬の技術を体系つけた。昭和五十二年より「讃岐かがり手まり」と呼ばれる。

## 伝統工芸士 荒木永子

所在地／香川県高松市鶴屋町五―一

香食ビル二階

TEL・FAX〇八七―八八七―四〇四三

九時三十分から夕方六時まで。日曜・祝祭日休み

## ※訂正とお詫び

酒林(第八十号)で、さかもとふさ様の絵と文で誤って前回(第七十九号)のイラストを掲載致しました。今回(第八十一号)にて修正し、再度掲載させて頂きますのでご了承くださるようお願い致します。

「酒林」随筆特集 第八十一号

平成二十三年一月一日号

発行人 西野信也

印刷人 株式会社 太陽社

発行所 西野金陵株式会社

高松市亀井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。